

書評

【評者】

堀田知光

独立行政法人国立がん研究
センター理事長・総長



知っておきたい がんの日常診療 あなたならどう対応しますか？

鳶巢賢一・岡田 定・山内照夫 編

●A5判 頁332 2013年

定価:本体 4,500 円+税

[ISBN978-4-7583-0369-9]メジカルビュー社刊

専門外でもできる「がん」への対応

がんはかつて不治の病のイメージが強く、気軽に相談できる環境にはなかった。しかし、今日ではがんはありふれた病気になり、医療者であれば誰でも日常診療のなかでがんやその疑いのある患者さんに頻繁に接する。がんの疑いのある人やがん患者さんは不安や心配にかられるのが普通で、身近に医療者がいれば医師でなくても相談したり、頼りたいのが人情である。

本書は、がん診療を専門としない医療者が、がんやその疑いのある患者に接した場合に、どのように対応すべきかを症例をもとにロールプレイ方式を取り入れており、よくある専門書とはまったく異なる実践的な手引書である。本書で取り上げられている領域は、1. がんはどういう病気か、2. がんの検診、3. 症状や検査からがんを疑うとき、4. がんの診断～治療中の問題、5. がんの治療後の問題、6. がんの精神的な問題、7. 地域連携に分かれて約150項目の症例が提示されているが、いずれも日常よく出会うケースである。すべての項目は見開き2ページに収められ、左ページには患者さんが受診する場面から始まる症例が簡潔に提示され、それへの対応を問う形になっている。そして好ましくない対応例が「NG」で、好ましい対応例は「Good」で示されている。右ページには、検査や病気、治療法などの解説が写真を多用して解説されている。

具体例の一つ上げる。「PSA高値を指摘された81歳男性」の例では、「今年から住民検診の項目で選べるようになったPSA(prostate specific antigen: 前立腺特異抗原)検査を受けたところ、異常値を指摘された」と81

歳のかかりつけ男性であるWさんが受診した。正常値4.0 ng/mLに対し、6.3 ng/mLだとのこと。これまでPSA検査は受けておらず初めての検査だった様子。以前から夜間頻尿があり、前立腺肥大治療薬である α 受容体遮断薬を処方されていた。これに対して、あなたならどう対応しますか。「異常値だし、がんがあるといけなから、すぐに生検したほうがよいと思いますよ」は「NG」。「もうご高齢でもありますし、何もしないでいいのではないですか?」も「NG」である。「Good」は、「ご高齢でも治療が必要な前立腺がんもあると聞きますし、PSAだけでは判断できないこともあります。また、PSAは前立腺肥大でも上がることもあるので、ひどい前立腺肥大がないかどうかも含めて泌尿器科で検査してもらった方がいいのではないですか?」と例示されている。模範解答はNGに比べていずれの項目においても長めになっているが、丁寧な説明を心がけるということであろう。さて、このあとはPSA値のとりえ方の解説があり、Wさんへの対応としての留意点やガイドラインに基づく推奨が示されている。「Wさんのその後」では手術適応のある大きな前立腺肥大であったことが明らかにされている。最後に「!」マーク付きで「高齢者(>80歳)ではPSA>4.0 ng/mLが異常値として当てはまらないケースがある」と太文字で大切なポイントがダメ押しされているので印象に残る。

本書は、このように具体的かつ簡潔で分かりやすい内容と表現となっているので、がんの専門外の医療者が手に取ってその場から十分に役立ち、かつ楽しい一冊である。